

ニホンウナギの資源回復及び管理に関する研究

(予算区分 [受託] 研究期間 2020～2023 年度)
担当：水産・海洋技術研究所浜名湖分場 吉川昌之
深層水科 倉石 祐

【研究の背景とねらい】

- ・ニホンウナギ（以下、ウナギ）は、2014 年 6 月に国際自然保護連合が絶滅危惧種に指定するなど資源の減少が危惧されています。しかし、天然ウナギについては生態など基礎的な情報が少ないのが現状です。
- ・また、ウナギの放流が行われていますが、放流魚の生き残りや産卵への参加についてはほとんど判明していません。
- ・そのため、ウナギの生態について様々な情報を蓄積し、得られた知見を基に資源管理を推進していく必要があります。
- ・本事業では、ウナギの生息場所として重要な浜名湖で黄及び銀ウナギサンプルの収集や漁獲情報の収集・解析を行い、産卵親魚である銀ウナギの実態を把握します。
- ・資源を増加させるために、産卵回遊が期待できる親ウナギの養成及び放流手法を検討します。

【これまでに得られた成果】

(2021 年度までの成果)

- ・(浜名湖におけるウナギサンプルの消化管及び生殖腺重量比) 浜名湖において小型定置網により漁獲されたウナギを調査した結果、漁獲日が遅くなるほど、消化管重量比は低下し、生殖腺重量比は上昇する傾向が認められました。
- ・(漁獲情報の収集・解析) 漁業者 1 人当たり 1 日当たりの漁獲量から、黄ウナギの資源量は減少傾向にあることが示唆されますが、銀ウナギの資源量は、現在はまだ減少に至っていないと考えられます。
- ・放流のために漁獲されたウナギと養殖されたウナギを比較すると養殖ウナギは鰭や目が小さく、回遊のための形態ではないことがわかりました。

(2021 年度の成果)

- ・(浜名湖におけるウナギサンプルの血中ホルモン濃度) 雌雄とも、エストラジオール 17 β は時期が遅くなるほど上昇する傾向が、テストステロン及び 11-ケトテストステロンは黄ウナギより銀ウナギで高くなる傾向が認められました。

【期待される成果】

- ・浜名湖における天然ウナギの生態や漁獲実態が明らかとなり、天然ウナギ資源の管理方策立案に活用されます。
- ・産卵回遊が期待できるウナギの養成が可能となることで、親ウナギ放流事業の活性化が図られます。

【今後の計画】

- ・浜名湖で漁獲される黄ウナギ及び銀ウナギの生物学的特性の把握と浜名湖内のウナギの漁獲情報の収集を継続します。
- ・飼育条件を変えることで産卵回遊するウナギの形態に近づけることができるのか検討します。

(作成 2022 年 4 月)